

問題1 (学科共通問題)

近代に入って、都市に代表される社会基盤施設は急速に発展したが、一方でさまざまな弊害を生んでいる。こうした状況を、養老孟司氏は以下の文章で、語り始める。

文明ということばを具体的に言い換えると、都市になる。中国、インド、中近東、地中海沿岸における古代文明を総称して、世界の四大文明という。これも具体的には、じつは古代都市を指している。

現代人は、その余裕さえあれば、都市を作る癖がある。十九世紀以降、文科系の学者は都市化に伴う現象を指して「進歩」と呼んだ。理科的にはそうした進歩は価値中立だから、私は進歩といわず「脳化」という。都市はまさに「脳が化けたもの」なのである。

20世紀はとくに都市化が目立った時代である。それがなにを意味し、実際になにが起こったのか。それを理解するために、都市とはなにかをまず考える必要がある。

(20世紀の定義[1]、岩波書店、2000より引用)

養老氏は、大脳皮質に代表される人間の脳の機能を

- 1) 言語を典型とするシンボル操作能力
- 2) 意識的に設計しなかったもの、言い換えると自然や身体を排除する性向と説明している。

この1)、2)の脳の機能を考慮し、「脳が化けた」都市の特徴を、具体例もあげて400～600字で述べよ。

採点委員各位

学科共通問題で、養老孟司の文章を引用して出題した辻本 誠です。

出題の「脳が化けた」という表現が強烈だったこともあり、異例とは思いますが、出題意図を説明させていただき、採点の参考にしていただければ幸いです。(まあ10点の採点枠の中では影響は無いと思いますので、お忙しい先生は読み飛ばしてください)

養老氏は、脳の言うとおりにしていると、「全てが人間の考えるようになる」という方向に社会(都市)が進み、「生まれてきて、年を取って、病気になって死ぬ」という計算できない部分を排除する傾向が強くなる。そして、その典型が都市で、歴史の示すように結局、滅びるという理論展開をしています。

受験生の理解がそこまで及ぶとはあまり思っていないですが、このことをちゃんと理解して、批判的な目で都市ならびに現状の土木・建築分野を語った回答があった場合、これを評価してやって欲しいというのが、この一文のねらいです。

なお、次頁の回答例では中立的な表現をとっています。

参考に、引用した文(20世紀の定義[1])を添付しました。また、この文章では短くて、上述の展開はよく分からないので、採点会場に一部づつ、養老氏の主張がよく分かる文章(脳と自然と日本、白日社、2001)を置いてもらいます。採点時にお時間があれば。

辻本 誠

(回答例)

都市とは、一般には一定以上の規模で、周辺に比べて人口密度が高く、いわゆる 2 次、3 次産業の営まれている場所とすることができる。この中では必然的に、周辺よりも高度な土地の利用や、移動の便宜のために道路網が整備されることとなるが、実際には都市のシンボル性を高めるために、たとえば中世の都市において塔の高さを競ったり、WTC のような超高層ビルを建てたりするように、必要とされる性能以上の高さの建物が作られる。また、道路を敷設する際、性能として求める必要のない歩道に対しても、地面が見えないように全面的に舗装されることがローマ時代の都市から行なわれている。

前者を養老氏のいうシンボル操作能力の発現とみることができ、装飾的な彫刻に囲まれた大伽藍とともに中世以降の都市の特徴といえるだろう。後者は、明らかに脳の予測範囲の外にある自然の排除を意図するものであり、身体の排除という点では、都市ではほとんどの人が病院という特殊な場所で死亡することをあげることができる。

このように、人間が作り出した都市は、人間の持つ大脳皮質の機能の発現とすることができる。

(467 字)